



つゆのひぬま

山本周

新潮社版

© by Kin Shimizu.
Printed in Japan
1968

河盛好蔵
奥野健男 監修
土岐雄三

つゆのひぬま (山本周五郎小説全集29)

昭和四十三年十二月二十五日発行
昭和五十三年十月五日十七刷

定価 一〇〇〇円

著者 山本周五郎
著作権者 清水きん
発行者 佐藤亮一
印刷所 三晃印刷株式会社
製本所 大口製本株式会社
発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(03)二六六―五一
編集部(03)二六六―五四―一
振替 東京 四一八〇八番



乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目

次

将監さまの細みち……………七

しづやしづ……………四

肌 匂 う……………八

つゆのひぬま……………一〇

深川安楽亭……………一四

枕を三度たたいた……………二

鶴は帰りぬ……………二五

花 杖 記……………二九

つ
ゆ
の
ひ
ぬ
ま

将監さまの細みち

一

夜の九時すぎ、——おひろが帰り支度をしていると、四人づれの客が駕籠で来て、あがった。四人とも酔っていたが、身装も人柄もよく、どこかの寄合の崩れといった恰好で、「この土地は初めてだから」よろしく頼むと云った。

四月中旬の曇った晩で、空気も湿っぽく、夕方からずっと、いまにも降りだしそうな空もようであった。おひろは通いなので、そのまま帰ろうとすると、店を預かっているおまさが来て、「残っておくれ」と云った。

「一人はあたしが出るし、幾世と文弥が二人を引受けるっていうの、お客もまわしいっていうんだけど、女の数がそろわなければ帰るって、——済まないがたまのことだから、今夜は泊ってっておくれな」

おひろは返辭を洩った。すると、おまさの眼がすぐに険しくなった。

「いやなの」とおまさが云った、「いやなら小花家さんの誰かに助けてもらうからね、いやなもの無理にとは云わないんだから」

「ええ」とおひろは頷いた、「泊ります」

おまさは「はつきりしてよ」と云い、おひろはもういちど「泊ります」と答えた。そんならちよつと三河屋まで酒を云いにいって来て、それから支度を直して出てちょうだい、もう店も閉めていいわよ、そう云っておまさは奥へ去った。

——またいやみを云われるんだわ。

おひろは風呂敷包を置いて、そう思いながら裏口から外へ出た。

赤坂田町にあるその岡場所は、俗に「麦めし」と呼ばれていた。一ツ木の通りを隔てたうしろは小屋敷で、片方は溜池の堀に沿っており、堀のすぐ向うには、山王の森が黒ぐろと高く、こちらへのしかかってくるように見える。おひろは堀端の道へ出て、三丁目にある三河屋までゆき、酒の注文をして戻った。

——またいやみを云われるのよ。

暗い町を戻りながら、おひろは幾たびも溜息をついた。良人の利助の尖った顔と、おまさの意地の悪い、嘲笑するような顔が眼にうかび、まるで二人がなれあいで、両方から自分をいためつけているかのように思えた。

「五十年まえ、——」とおひろは首を振りながら呟いた、「五十年あと、——」

そして、その呟きとは無関係に、頭のなかで自分に云った。

——わかつてるじゃないの。

そうだ、わかつていることだ。泊って帰れば、良人がいやみを云うのはわかつている。だが、泊るのを断われれば、おまさは小花家から代りの女を呼ぶだろう。そうすればもう、自分が染井家で稼げなくなるのもわかりきったことだ。

——どうしようもないじゃないの。

岡場所の女で「通い」というのではない。殆んどないといつてもいいだろう、おひろは特別な事情でそれが許されていた。去年の七月まで、おひろは京橋五郎兵衛町の「増田屋」という料理茶屋に勤めていて、そこで客の源平と知りあった。彼女には病気の良人と、政次といつて四つになる子供があり、良人の医業や生活をたててゆくために、（どうしても）もう少し稼ぎを殖やさなければならなくなっていた。それはどうにもならぬほどさし迫っていたし、病夫と子供を抱えた、ほかに芸のない女には、それをきりぬける手段は一つしかなかった。おひろは源平に相談した。彼は芝口二丁目で駕籠屋をやっているかたわら、赤坂田町の岡場所に「染井家」という店を持っており、——それは友達のことを引受けたのだそうであるが、——店はおまさという女に任せていた。

おひろはそれを聞いていて相談し、源平は承知した。

おひろは金は借りなかった。そういう金は軀を縛られるし、嵩むばかりで、ついにはぬけられなくなることも、知っていたが、病夫や子供の世話をするためには、家から通わなければならなかった。源平はそれも承知して、田町の店へ伴れてゆき、おまさ事情を話してくれた。こうして、おひろは通いで稼ぐようになった。良人や近所の人には、「芝神明前の料理茶屋へ替った」と云い、午に出る夜の九時か十時には帰る、という生活を、一年ちかくも続けて来た。

染井家には女が三人いた。店を預かっているおまさは二十二、文弥は二十一、幾世は十九で、おひろがいちばん年上の二十三であった。三人はおひろに親しまなかつた。親しまなかつたばかりでなく、反感をもっていた。敵意とまではいえないが、反感をもっていることは慥かである。理由の一つはもちろん「通い」ということだろうが、もう一つ、亭主と子供があることも、彼女たちの氣にいらないうであつた。——三人には三人の、不仕合せと、重荷があるに違いない。

それならおひろの不仕合せにも、同情してくれていい筈だと思ふのだが、そうではなく、三人とおひろを白い眼で見ると、客の前などでも、意地の悪いことをしたり、云つたりした。——当然のことかもしれないが、三人にはおひろの不仕合せが、自分たちのよりも小さく、その荷が自分たちのものより軽いと思つてゐるらしい。病人はいつも自分より軽症の者に嫉妬を感じるものだ。おひろは彼女たちの嫉視と反感を、おとなしく黙つて、うけながして来た。

——どうしようもないじゃないの。

おひろはいつも自分にそう云いきかす。染井家へ通いはじめてからずっと、自分の力に及ばないことは、つまり「どうしようもない」と納得するよりほかにしかたがなかったのである。

「五十年まえ、——」とおひろは無意識に呟いた、「そして、五十年あと、——」

気がつくとも雨が降りだしてゐた。ぼんやり歩いてゐたおひろは、頬に当る雨粒で気がつき、手拭を出してかぶろうとしたとき、「おそ、さんじゃないか」とうしろから声をかけられた。おそ、のは染井家でおひろの呼名であつた。振返つてみると、平吉という三河屋の店の者で、右手に角樽を提げていた。

「これから届けにゆくとこなんだが」と平吉は云つた、「おめえまだこんなところにいたのかい、驚いたな、どうかしたのかい」

おひろはあいまいに首を振つた。

「掘っ端だぜ、へんな氣を起こしちゃあいけねえ、大丈夫かい」

おひろは大丈夫よと笑い、「あんたも御苦労さまね」と云つた。

「まったく御苦労さまさ」と平吉は云つた、「こんなじぶんまでしょうばいをする酒屋なんてあるもんじゃねえ、へ、うちのこうつくばりめ、おらあもう逃げだした」

そして彼は小走りに追いついていった。

二

おひろは酒を飲まされてひどく酔った。

飲ませたのは客たちであるが、おまさが「このひと底なしよ」と云ったからで、「そんなことはない」とおひろが辞退すればするほど、客たちは面白がり、四人が代る代る、休みなしに盃をさした。こんなところへ来る客は、殆んど酒などは飲まない。飲むにしても、一本か二本がおきまりであるが、その四人は十二時すぎるまで飲み続けた。——はじめのうち、おひろは用心して、盃の半分は盃洗へあけるようにしていたが、そのうちにおまさ「このひと御亭主と子供があるのよ」と、いつもの意地悪を云いだし、すると、客のほうでもそれが意地悪だということを察したらしく、一人が「そいつは有難い」と逆手に出た。

「そういうことならおれが願うでしょう」とその客が云った、「ひとのかみさんと寝れば、重ねておいて四つにされるか七両二分だ、おそのさんはおれがもらうぜ」

「そうはいかねえ」と他の一人が云った、「そのひとは初めからおれにきまつてるんだ、たつて欲しいんなら七両二分出してもらおう」

他の二人も同じようなことを云いだした。明らかに、おまさに対する当てつけらしい。おひろは胸が熱くなり、それから飲みだした。

文弥と幾世は、泊りの客があったので、さきに部屋へ去り、おまさとおひろが、四人の相手をした。おまさはまったく飲めないたちだし、客たちがおひろにだけちやほやし始めたので、それ

ならしょうばいをしてやれ、と思ったのだろう、自分で立ってどんどん酒を運んだ。——おひろはやがて泥酔して、わけがわからなくなり、客といっしょに部屋へはいるなり、嘔吐した。客はいやな顔もせずに、窓をあけて吐かせてくれ、肩を撫でながら「わるじいをして済まなかった」と詫びたり、水を持って来てくれたりした。

そのまま熟睡したらしい、眼がさめると、客が腹這いになって、煙草をふかしていた。おひろはそちらへ向き直った。客は「いいよ」と云ってその手を押し返し、「気持はどうだ」と勧るようにおひろを見た。おひろは微笑しながら「さっぱりしました」と答えた。

「お世話をかけて、ごめんなさい」

「こっちが悪いんだ」と客が云った、「こっちも酔っていたもんだから、本当に飲めるんだと思っただ」

おひろははにかみ笑いをして、「盃に三つくらいしか飲んだことはないんです」と云った。客は煙管を置いて、枕許の水を飲み、おひろにも「飲むか」と訊いて、湯呑に注いでくれた。おひろはまた胸が熱くなり、眼をそむけながら、その水を飲んだ。客は横になって「さっきの唄をもういちど聞かせてくれないか」と云いだした。

「さっきの唄ですって」とおひろは訊き返した、「あたし唄なんかうたったんですか」

「うたったさ、覚えていないのか」

「嘘でしょ」とおひろは云った、「あたし唄なんて知りやあしませんが」

「唄っていつても子供の唄さ、——向う横町だったかな、いやそうじゃない、烏どこゆく、……でもないし」

「ここはどこですか」